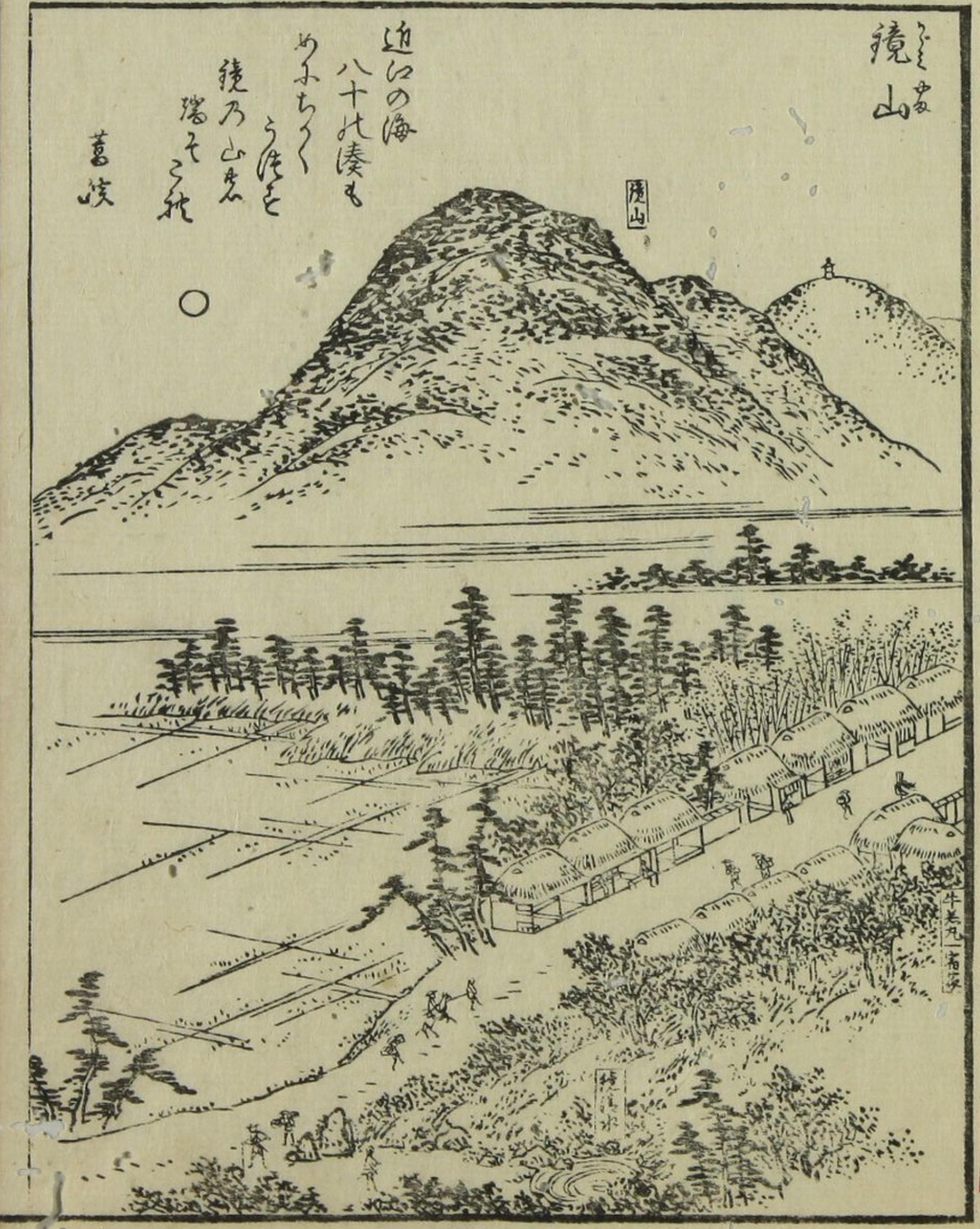


木曾路名所圖會 一坤



7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7



大嶋社二前日所小神樂殿本社の拜殿
樓門本社小向ノ御古代の御子一傳持明院太納言

島居額八幡宮と書持明院太納言

其外末社多々署之

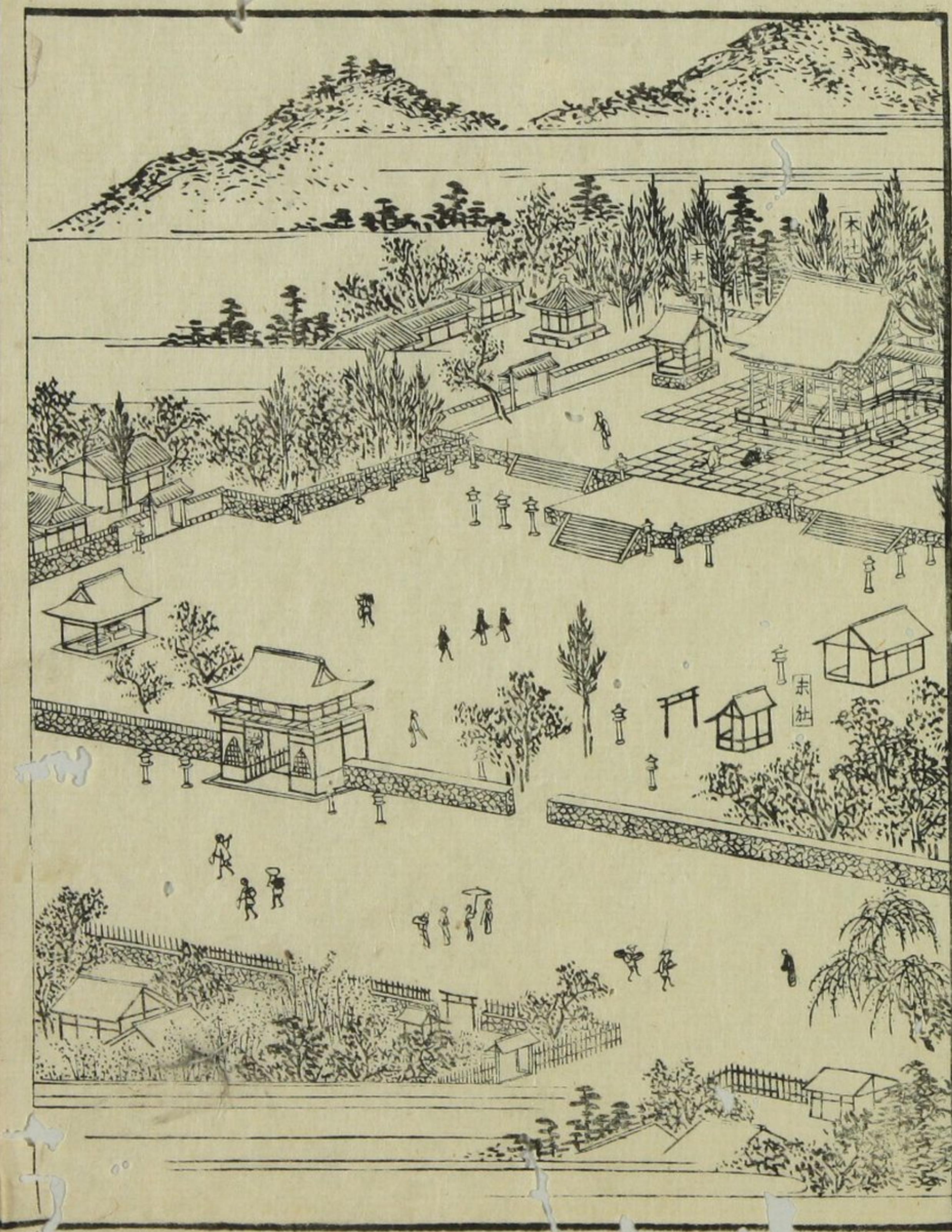
支當社の頃庄と原小社傳云人皇十三代成勢帝高穴穗
宮小あく即位の時武内大臣小令ド此瀛津島事於多
大鳥大神と祀也歟后神の告よろそ八幡宮が同殿も演
まれ天慶年中平將門追討の時六孫王経基公系懿あり
祈願とこゑ直不賊敵ちびむ因縁止止小移ト大振八幡堂
称く八月十日酉酉祭と行はる御在陽成院の御宇天下旱魃の
時晴雨を祈小迷よ靈應こう毎歲三月十五日御す
塔辨おきの神幸くわ天曆てんのじ佑めぐら本家は國よ經きより民の神
と崇信まこと神鎮まこと五百餘石よを寄附ふ生土三十餘箇よ前まへと附まへ

神威光耀くわうよう長德二年ちよとくより放生會ほうじょう行はく寛弘二年五月
築つきに一社いっしゃ城しゆ功こうして下しもの社しゃと稱そなへ弘安中ひやうちより崇古舊そうこきゅう而ひ來き奉幣ほうひの忍しの神かみ夙ゆ而ひ海うみ上うへ也よ亡なき而ひ神かみノ里さと而ひ星ほし霜しやく重おも永祿十一年九月信長公のぶながの為ため不迎ふむか國くに佐さ本もと家いえ十八箇よ前まへ一箇い減へまま神かみ社しゃも此時このとき不裏弊ふりひして終す不涉ふせア及ま其その頃ごろ豊臣秀次
平ひら秀ひでトあくく一い神殿じんでんと再興さいこう一い高觀たかくわん不ふ其その後ご寛永廿かんえい年ねん國くに東ひがの命めい之の神かみ領りよう立たつ石いし神職じんしょくの除地じよぢを賜たま神かみ德とく而ひ處ところけこむむ小こ意い之の靈れい之の也やくくぞ見みる

八幡山十景和歌序

小村季吟法印

和月の十日あすり此山の八幡宮乃神ワタニノミコトでゆりてせく
けくゆく里さとハツアラカシ神カミの寺てらを尼アマタ
はく形かたちば達たつてふ尾お上うへよの肩ひじの手てがうまか



本多一ノ北二



八幡宮
ひらんぐう

比牟禮社
ひむれのやしろ

もくへむるがせりやとみはまめざぐわるかのちやら。
もひらあいねす夕日れぬふよこおだのゆゆうてまめざる
鴻はとくわあまれをむかひまゆまに今ひとうだくねとふ
みと教そひて考乃ゆきれまむじてあれ面をこそ花田
ちるづれの森にう深牛せれとし年々を市人のりひ海士のほ
するはとくわれ森にすゞりほすばたあらは体の可計
あらひとつひらくくさびにまもろかひ觀音寺衣笠山と
つち三十とす一とく爲め船人それでこねてとてにまうか
安去のふまえそくおあなる物見寺こを放信長の舟と遠景
山下港と北うちせたまはまううれぞ松乃月の舟を考
のえりとアリせめりき居色よりすまくすまうに三上方
山越びとく本の石小舟とくまくねと続乃ひもとくぬみ唐云
乃八の美景にまじくがまく三十比景あまをつてうだよ

見色さんとくわ其夜笠と都の小山よゆうだ豊浦と櫻乃
葉歩れ東にあるをよめいひと此國のあまくわあづ三上
かくみひだりとれとれとれとれとれとれとれとれと
めはよみでうんとだらめらめらめらめらめらめらめ
めらめらめらめらめらめらめらめらめらめらめらめ

かどもあくよせらめらめらめらめらめらめらめらめら

知りれすあやけはみのに纏えの神りぎに落竹りて

まみれでゆく里ふくらひあ葉、移す事す。まき

十景のうちハ勝曉鐘

長命寺

長命寺山中庄の上小所ハ勝より五十町杵
西園巡礼三十一處のれ所

本尊聖親音

本尊

水莖岡

水莖岡の南の山をつり葉神の

左今太

水莖代忌の子小姉とおれと桜の軒の霜吹

新古今

みえの景乃萬葉を舞て今船も帆船の風

昭法下

筆後撰

前後撰

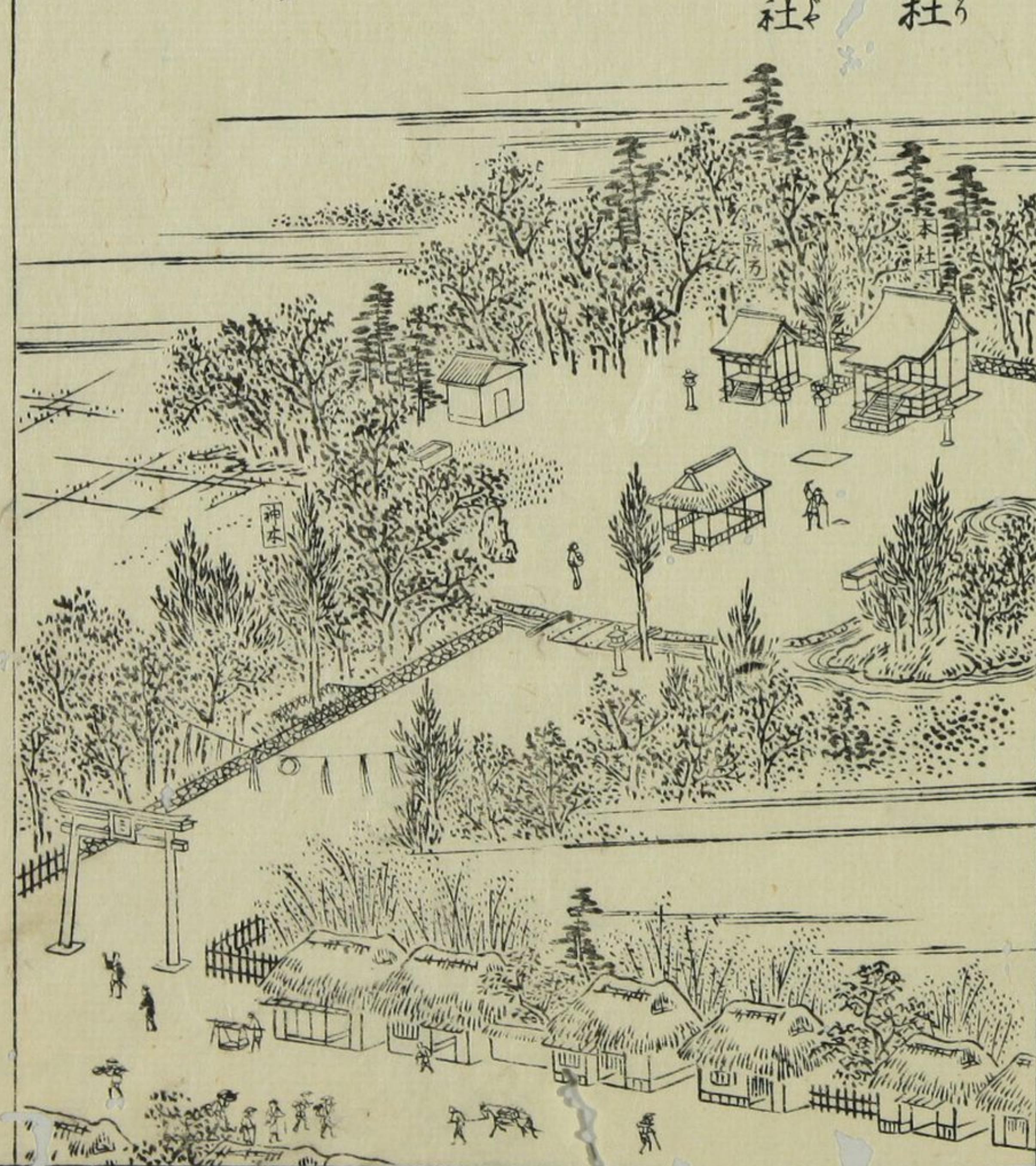
玉葉

日

後後拾

新千載

日



水茎の墨比濱茅の茎葉乃端りもや枝葉をきよし

火浦皮

定家

人九

和家

左大路

三佐忠

五美信長

六家内

平常院

一昌宗

中納言

雅綱

而室

序製

蒲生野武佐より里をりうりう小西生木村

拾送

老石社行

蒲生野れども小住熟乃やせの君が御代の數う
行者也も武佐でし此ソレ山あれあつてに泊モシテ御代ニリ
とくみゆきう好風來テ山中ニ身モ一處モ都代ニリ
ヤマナカア比良松小ちう比良の寺西山のすに拵シテ
み送寺れはより乃葉は居たる庵是えまかや阿須人
心哀すり行す房と底止様のやせひ浦だけれども

物見

都出事くじあらそくすかへすかへすきひのとみ松風
はーや林出くやまくやまく御の山もととむ程よ老曾の處とくよ
おじく下木場ききき下木場ききき木場きききねつわは裏ふうとくり事じとはくらうる

月日をまく

本音ノ批五

かじれ森りやひふき書ひ名す一せひすりあれ下手

老種杜

西生木のひがふ老種東老種の二ヶ村あり

後拾

新勅

續拾

新勅

奥石神社老翁の西村小あり延喜式内
祭神天津见屋根命相殿小飯傍的作を繋はば里の生古被く
沙々貴神社鳥居額宮と書くいふ由縁ある
祭神少彦名命作徳天室を傳せ縁ある

は教寔親王を守護帝歎九の皇む近江源氏の祖也傳本
大鷦鷯尊と申す。

當社を近江源氏一統の祖神として神領一百石又讚列丸龜
京極家うちも一百石附與し終其祖先を承當する藤倉の代小二
十六人の國衆八十二人の郷士なり足利源氏卿の時佐と本祐渡利
官入道乃至一國を帰否へ甚後又近列ニツク分生と愛鄰門を
南を江南佐々木六角と号し又少弐に北佐々木宗祐と云ふれ
連綿として弘治二年己未無地義良義質等領職を領す
屋敷と号し京師の号より

淨嚴院(金勝山)と号す
本尊阿弥陀佛(悲心佛)の像

開山隆堯(印一派の本寺)と天正七年三月仲旬御成る
小於(淨)古宗と曰蓮宗室宗綱あり半へ信長死ニ
没(ゆきり)交不譽(ゆきり)

遠景山總見寺(安土山半腹)ふちう

本尊十一面觀世音(安阿彌陀)の像

三層塔(大日如來)木服(長谷寺)脚(脚)天不動明王

圓通閣(萬葉の高樹の歌)此の間小野宗心の筆

總門額(遠景寺の漫額)此の間小野宗心の筆

當山と天正三年信長公の御建宮(御建宮)とて開山と圓通閣の歌

と捧を携へ般闍波約する圓うり

信長公其讚云人も才もまことにあらずして名すて
ひやかを身とばそりよふ形り

今より代官として香火寂寞うして雲佛屋所花く猶晴る

晴一樹々と宿屋を近くよりて若く更よ寄る月の湖と照り

てもうれず哉もれど

安土山古城

信長公の墳墓あり今後中の石碑存する

信長記

正三位太納言兼右大將平松信長公近に國安土山を城郭小様へ可

首拂移して乃奉行先惟住み即左衛門尉長秀と可佐善名天高年
丙子正月上旬被作出一ノ長秀大將の榜圓様體を兼く日十七日
安土山より至く先善傳不可入具足成吉飯治妻通城も石集あひ
石を取べき山持て之を犯通路沼沢とも云ば阻崖とも云ひて多
走ぬく者と日小傍び春三月廿二日小信長公安土山被移御座
勢力を効と幸神めうりとて周先策院并よ駿馬二匹長秀下され
急急追馬廻以下の坂浦割あつらがれも度たる上り下り
更中草泥をすりそと西側の丸石垣の石を引せらるか大石を立てる
幸日月小休場所と裏アラカリ何共御下知もあらうれど我方ト

本音二三十九

坐大石を手へ上る幸巨靈抜い鳥獲上手鉤小弓ねば年少後もく
其功已小成の都て信長公と幼より弓幕に推進て仁義道德の学識を
勢ひて自共小私心無く理小勝くゆく所が功の益進ひ幸恵め春
氣發生處罰正しく邪正が辨ゆる幸生知とも申川谷ノ城小方す
虚明うきゆふ人の因ひは紀事す幸自西自東自北自南思て服せん

とよ幸船

十書

近列史

安土殿守

天正四年七月より普請仰付

普請奉行

本村次郎左衛門

上一重之金具

二重目より

序大工棟梁

小細工序大工

漆附

首刑部

瓦燒

唐人一觀

奈良瓦燒

三重百十二重發花鳥の画三件あるより花鳥の間とて別面を發
御座の間第六門先馬の絵次南八重發賢人の間とて是小勸善小
駒と牛仙人の画東北庇の間八重發十二重北間上小八重發仙人
呂洞賓傳說等の画而ア北二十重發牛駒の絵次十二重發ア
西王母の画西廻廊外の絵ア一度極二段廿四重發御物而ア法納
戸に小八重發の座發而ア柱根白壁接奉ア被阿
四重目西十二重發古巖上不龍虎の画而ア南十間竹の絵
竹之間とて次十二重發松と画に松の間とて東八重發相輪
風の絵次八重發許由頸泉潔坐て耳と解ア巢父牛と解
隔ア兩賢の出ア放鄉の絵ア而ア一く画其次小度發七重發絵
而ア金虎アうけ次十二重發内二間の所本手鞠花と画と其
次八重發庭子れ京大画を放小度北間とて

土基土花の高格七間發上不七重の天官以送らる珠よ前代未聞の絵
當アう先一重も土花小用られ二重は上の廣サ南小二十間東西十七
間高サ十六間才これあり柱の數武百四柱中立柱の長サせハ間をサ度守
或ハ生を足三守四方ニ御座敷の内みか黒漆アう西十二重發ハ金の張付
墨繪梅花符聖永德の筆入間の内書院也あアも小遼寺晚達
の画其本の底より金山石成墨ア次の四重才すの御棚より鳩の画又十二重
北間也輦乃絵は之鶯の間とて次より八重發奥四重發懿の離と
毛也う画南十二重發也漢唐の儒賢の画次より八重發らう東に十
二重發次より二重發其序より八重發それ御膳板の前ニ次より八重發
右門約六五重發御納戸又六五重發三絵の而モ物念く小の方
小去発ア其底度發せ六典御膳板前すア西六重發次小十二重
發門十二重發都合御納戸の教古前これら其下に金枕櫈を湯を

安士山總見寺



五重圓塔。南小の被風口。小四面。本坊。象あり。内外ともに施柱。朱塗門柱。金納。繪と紙。成道院法の圖。十六大弟子。諸國。御。御。御。御。御。鬼諸鬼を禹。端板。小龜。伏禹。高欄。葱窓。珠形物。あり。上の七重。二間四方。御座。象の内。蟻。金泥。外輪。も赤。金泥。四方。内。柱。昇。龍。降。龍。天井。小天人。紅白の軀と。畫し。御。座。象。内。施。絵。三皇。立。帝。孔。門。十哲。商。山。四皓。晋。七賢。等。瓜。画。に。狹。間。の。戸。織。物。絵。六。括。修。品。柱。み。船。黑。漆。みて。布。と。看。く。其。上。壁。地。不。黑。塗。う。跡。以。吾。妻。一。足。以。あ。ま。れ。う。其。ひ。の。壯。觀。し。

信長記云。其湊天龍寺に妙智院菴を和尚とて頑學多才の活潰あり。殊不。太明真澄。和済。兩朝の達人。す。由。舉。世。の。ひ。あ。う。乃。が。信。長。云。う。安。土。山。の。記。を。御。不。望。か。う。乃。と。され。も。因。持。レ。ヤ。え。幸。濃。別。候。下。南。化。和尚。と。て。名。偽。勢。ち。ん。則。此。偽。不。持。す。れ。勢。ぐ。往。ん。と。や。これ。久。假。く。其。首。御。從。あ。け。人。も。京。菴。堯。和尚。へ。令。せ。ま。宣。あ。れ。乎。

互。不。諱。レ。令。ま。ア。か。ど。も。會。發。活。う。れ。ば。諱。も。る。不。有。レ。して。則。事。を。渉。れ。る。其。記。ふ。云。

總見寺圓通閣小掲る。

古曰。太山之前難為山。大海之前難為水。日城。十六州。之。一。州。曰。江。江。左。有。山。名。曰。安。土。其。山。不在。高。其。名。高。大。山。也。蓋。夫。非。山。之。獨。得。名。有。寬。仁。大。度。人。居。焉。也。劉。夢。得。不。豈。曰。乎。山。不。在。高。有。仙。則。名。水。不。在。深。有。龍。則。靈。夢。得。一。言。可。并。按。焉。層。巒。之。崎。嶇。乎。上。者。自然。金。城。也。滄。波。之。渺。茫。乎。下。者。自然。湯。池。也。自。天。地。開。以。往。雖。有。此。山。一。人。無。識。者。矣。葛。原。帝。王。的。令。孫。平。清。盛。廿。一。代。之。華。胄。前。右。府。君。者。禁。庭。綱。紀。武。門。棟。梁。而。實。天。縱。聖。武。也。先。是。天。正。四。年。之。春。一。見。此。山。便。識。萬。古。

城地開闢洪基權輿于此矣。力士星馳揚石巧匠。
霧列運行則不終三年而其功大成矣。潛慮夫數百丈之石壁。千萬間之大廈。何翅力士之力。巧匠之巧手。唯流出府君之一胸襟而已。目機之所明。意匠之所巧。離婁之明。公輸子之巧。不可跂而及者也。峻宇高堂之凌碧虛者也。極夜摩都吏之壯麗。号直欄橫檻之聳翠崖者也。盡秦樓魏闕之華美。芳布地硬碱者。秉露內潤。葺屋瓦甍者。帶霜外光。西湖月之上玉階者。供府君之夜遊也。南浦雲之飛畫棟者。催府君之朝吟也。颯颯松風之動金鈴。聲呼萬歲山耶。紛紛白雪之映珠簾影。含千秋窓耶。權門貴戶之圍山。穢然也。遼水鱗革也。盡是無不丹漆黝亞寶塔之突兀。出林間者。疑繪遠寺釣。

舟之。一浮蘆邊者。怪圖歸帆。瀟湘十里。風景嘉陵三百里。山水不可同日。詰焉英雄豪傑之擁繡鞍。出入于相府。貴介公子之飄錦袖。往還于官途。爭紅花紅葉色也。憶兆民之富驕者。鐘鳴鼎食之家也。見者反目駭汗。聞者拍手賞嘆矣。江北白鷗懷惠占閑。江南梅花被化。含嗟信及豚魚。威知草木。當此時市人歌于市野。老耘于野。行者遜路。耕者遜畔。雖堯舜民文武。民不可讓焉。加旃起王道。以衰修神社佛閣。之破續斷橋平嶮路。是故四夷獻貢來復焉。八蠻解辯服膺焉。或臂俊鷺乞臣手其幕下。或上良馬。請將手其麾下。吁策勲偉矣哉。鳳凰現瑞。麒麟呈祥者。非今時何時乎。祝望祝望。向所謂木山之前難為山。天下人亦將曰。安土山。



實桑寺

之前難為山。野衲雖蓬衡叢州擣散陋姿。管見此名山豈無感慨乎。卒綴卑詞於八韵。述盛舉之萬

伏乞

咲覽

六十扶桑第一山

宮高大似阿房殿
若不唐虞治天下，蓬萊三萬里仙境

岐下沙門玄興拜稿

老松積翠白雲閑。
城嶮固於函谷關
必應梵釋出入間
留與寬仁永保顏

信長記云

信長公御事也小應ドタクが南化和尚へ黄金百両小袖三重御禮又
文部御使とて其勞功と算せし所又第考和尚の謙徳甚沛感嘆して
金子百両銀子百両小袖二重二位法旨御使とて恩賜されたり
猶よ謙徳却て光焉うとの箇様の半城やや餘にけ人の豪傑も何

半も辯讓して已達せんと達され奉る事あつて、金指玉帛以
て内々更にせんと自後は是をば聞き天總寺破壊の前も補ん事と
せらす。とぞひさう篠齋と付名ひるまく寛定ふ名す物ひるそ
そり此れまた手筆力能くして言縁う有ちて本言縁が通き多
許くさんを世の人今小説する事を禁むせんと半も

抑は誠古信長公天守が御坐す。初されば其威勢強大にして
據て天守と建たり半は附りし我をもよそと申捕番也。諸侯大
夫の象列一百年の大慶が端をよりて、名主御宿れ様く然執ト圍繞
もる奉秦の阿房宮もをゆく。芳ざかひ難う時、小天正十一
年六月十四日未明、小安土城の天守小明智左馬助火取放ち所
船と船が勝りては附集士とあらぬ今は城墟を見ろ。小殿ハ雀嵬
子と丸籠の船と遠し林村と幕替りて、脇く天守の址め惣見
院殿の古積木を建て所く小石壁礎石あり北の方と湖水側庭と

して私のゆきて鳴て所冲立竹生鷦夷家鷦夷を取ふ向く家えり
比良嶽比鹿の寫根や意の書むし一長等の上例で遠く眺み。昭和
あしの炭まで走り去りてより南の方を因園陽くとて二十と走
風魚東山桑實寺觀音寺の古城並小蒲生野荒蕪とくと
み船は木の船下に遡る。抑織田家の滅亡を鑒ゆ小秦の奉城亡を教
み而びに三天令みて一睡の憂ひ是をる如くうや思ふれる
素寢を勢す。東室ちくふ植しら蘿洞本堂を教ゆ。山城建宮

敏山桑實寺天守右室本尊藥師佛

十二神像

脇士月光

脇光

當山は古寺ありてむし。白鳳六年辛尊湖水より出現あり
其後元明帝の御す。篠足公の恩定惠和尚唐古うち篠足きつぞう
素寢を勢す。東室ちくふ植しら蘿洞本堂を教ゆ。山城建宮

経よし

箕作山古城東山道吉佐もう一里井

去程小波開齋表頌孟恩在席督義勝も事て家老の者也召寄信長

西園寺義向せば定く海道筋の城を先攻し一挙に蜀山の城に發

の本院へとて用兵機動すは事ひてあ難を本ふあつる兵衆

城を守り勝て益甚し信長は西園の経國を喜んで之を御津治

の難易等おびきの歎の傳説をも賜城入を許せば一久

親喜寺蜀山へ押寄せる様りて西園山へ至る三日と押す

是れ西園と蜀山の奥ある其他の方勢を押廻し終て西園本按本

相遠して北見する佐久右衛門尉本や藤吉左衛門尉也亦

浅井新八を兼て其他の責を小定されず事うれを鬪を以て之を攻

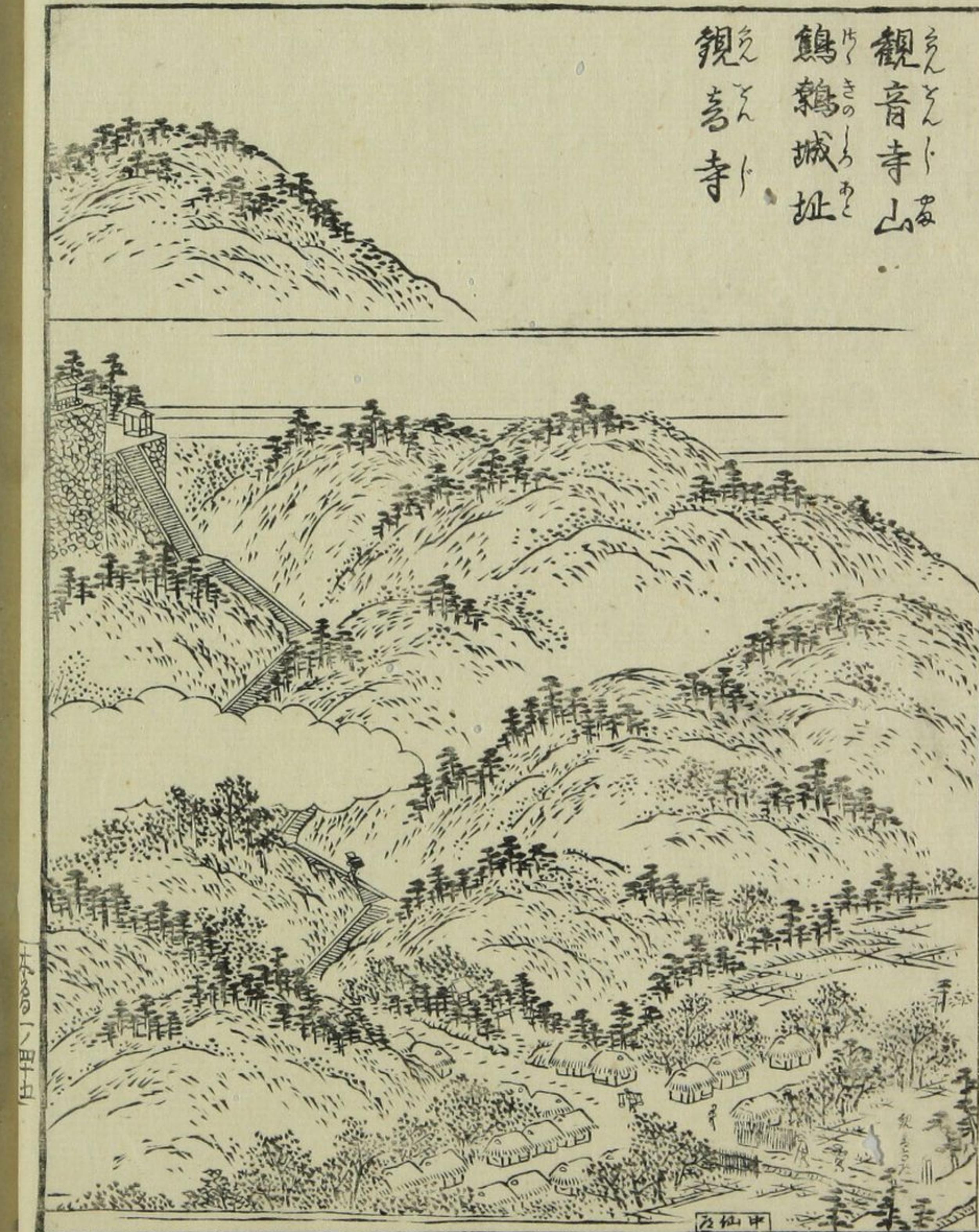
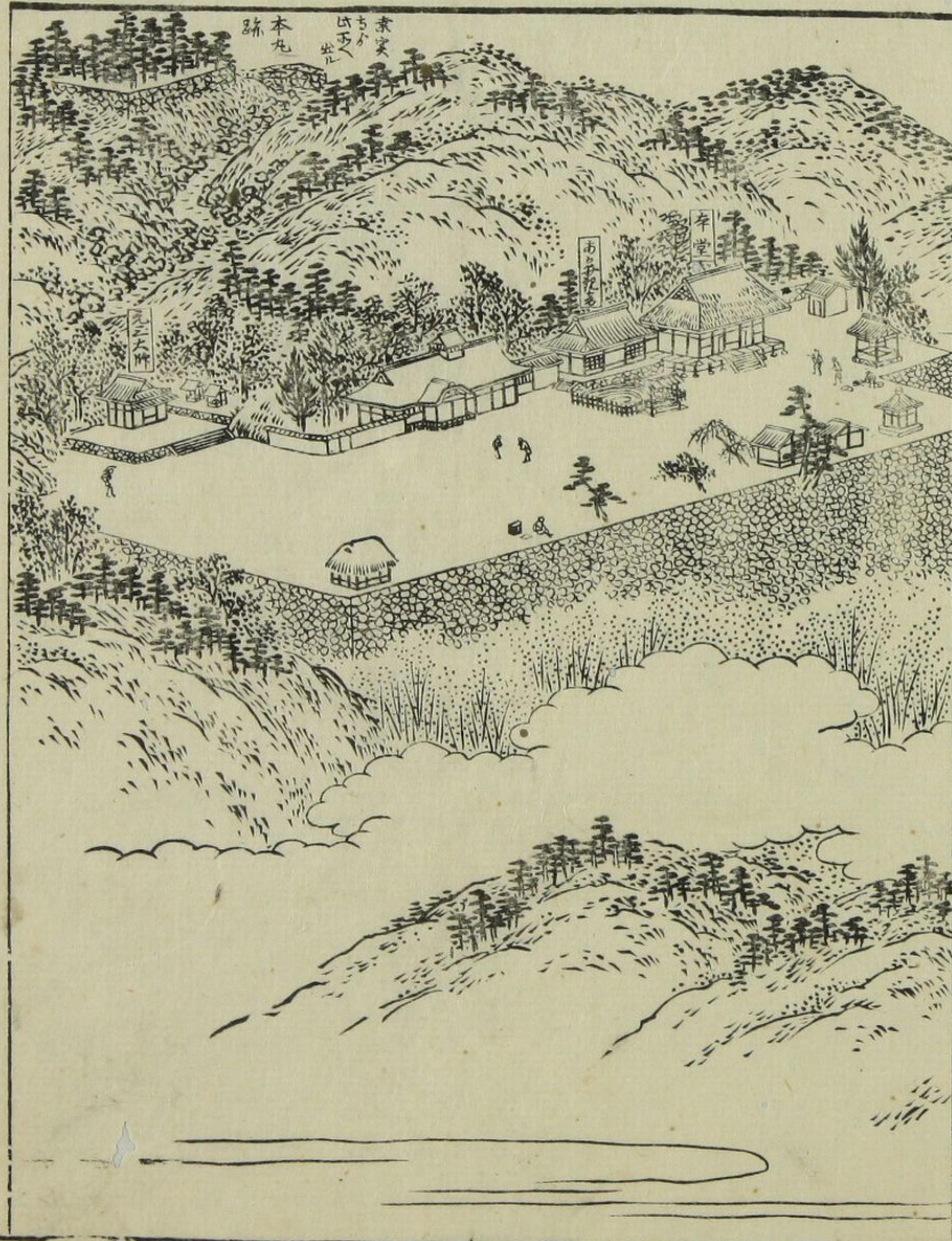
害るゝ小林の内山を西園の何某建始深へと義とを關を以て之を攻

ト一丈五尺を一けた半尋と弱く之を會取る人殺をうる害せ恩

城も絶え叫き喚んぞ攻を間けりく味牛引を人と走けると追徳

山のすすめく早速を兵ども武昌移討を勇みよる事あれ

は勢とめにあひれや者ども也人の太將言ふ極く下知一けまつりと
よりをむ前さう所へくかもたれひ居て三筋をくわせ壁際を
旗の物うござ投入せ入面もすばにへんとくねを欹るゝとや
思ひて人を出でて其不活くるが如くやんとひねを佐久間に
て手與せし佐久間久六原田與助本下アシタと手與せし竹中半蔵
源資貢義高尉本村隼人云丹羽又手與せし林志鷹取と云
名だ是と持と持と進も一令公助られぬと旗とを辭を浮不
して傍えきと申下間即は由を以ての太將に注をくらべ信長に
も幸うれぶ多小かく下る間佐久進もおまづ味牛中の者ども一令
と助多体を修めやとてねをくらべて進も一令
角も幸の能く小斗ひ進と宣ひ一方其の瓜清と勝因を嘗
とをよそうる佐く本業よお送してこそ見えてうなれ其の城落
させしゆく蜀山の味も其の用退く親喜寺も鬼やせん角



やあんせむわに發きたる三雲新左衛門尉と三姫左衛門尉申
名前を是小字アセセテモ浩く叶ふだうべ一すが落とせり
身を食うて財食以待て度合松の心を雪んと思ひさへ廢され
考が居様へ返せられ候去候て家老の面くつと計存られ作せ声
放く申候が若も内く退くへあうをとおもひやれらるるの名
あの鬼神の様うに信長小笠又成里中く歎對や幸恩のもよ
ば维立うせば夜も明うんざ卑そくせ同ドルれ走教年経訓一
所うれしけ彼とくへあんされども上下せ不舍城助くかく思ひ其
自ら執事と切くらわしの御曹ふぶく淮園内我子丈其とゆくと
形どく、辞半君臣上下九分を極く上を下て親孝寺坂と下立て
女ふ共と聲次もあく小悲をあひて维れと峰よ勢く多く小分も
まごの御と聞得く意すりか寛小一年平家の久都と落
き落ひーか船と角やせあく表きり取て親孝もの城落

去り乍ら跡く小袖甚一株く共一日二日の内小十八箇跡中で開退を
其外味方も序う出来ば人質を取甚處い已が居様小五等落とす者
退散へなる城々を宗徒の人々入金れり拵近江國中の城々将来
倒のべく波羅く坐落去一なる半ハ信長卿の一胸襟うやう
勢練うるを相圖ふうじて政事う終う能く兵船は多くてへゑ
箇様よもづりキドヒう兼て故の謀底よく聞石屋すねうを角
と争うるれ嘗て謀署の益く半舉てやうんもつ半ぞと落
井が家老小竜尾英徳ちやだうな侍の人文てつまご智謀の底
幸志う後見や漢の高祖の天下を保へを防ぐる事の強良ありと謀底
惟幕の内小ぢに王者比附せ成一幸もあう今味方の將よ本
下秀吉あく深慮が外ふあくは半ね漢書ノ記述とぞと云ふ
井づ山の尾續と小平坂とより

小
松
寺

平
坂
寺

筑
山
寺

寺

織山 観音正寺 東街道 清水鬼の左乃山上寺あり
稟の蹟あり

奉尊千手観音 天石御腰王四天王

毘沙門天不動明王

辛嘗の脇櫻小安達

閑伽井観音 積善井雲小

元三大師堂 辛嘗の西面

當山と織山五箇寺の其一もて聖徳室の手創也れより

佐々木家近附を終じるよう修造歟う織田家の駒援す

むしに変り射相力

觀音寺古城 銀閣寺小築ふ今小石壁

信長あらわすに跡に高利義昭も光源院殿拂金京南訪一寺院拂門主覺を度得業を

ナ幕末あらわ三好左京主義繼反対して義輝公と弑ま拂金寺

覺慶公も討あらき謀ありし松圓石を其の爲までひ

迎の親王城を拂憑かうれども義徳が子れ義弼ニ承と其に一味

をあらじ功をねば付すふと企あるふりく山國と對ひて之は淺倉義

景が謀方のひくも果てて因縁濃ひ波平へ封と織田信長と拂ひ

ひうれど即君臣の禮を重んじ合戦へちが拂原治の前途不迎の

佐々木攻めよ不自かして其逃跡觀音山相団より高城へ其

外羅城十八箇所二月の内由政麻へ迎の一夜よ平塙へ永禄十一年

九月十二日よ高城へ二日をもて拂ひて高城へ永禄十一年

それより義昭公將軍に任じ移ひて而よ義昭公と信長と不快

其事と信長教束の諭書が宣ひ義昭公假び猪庭へおもて帝

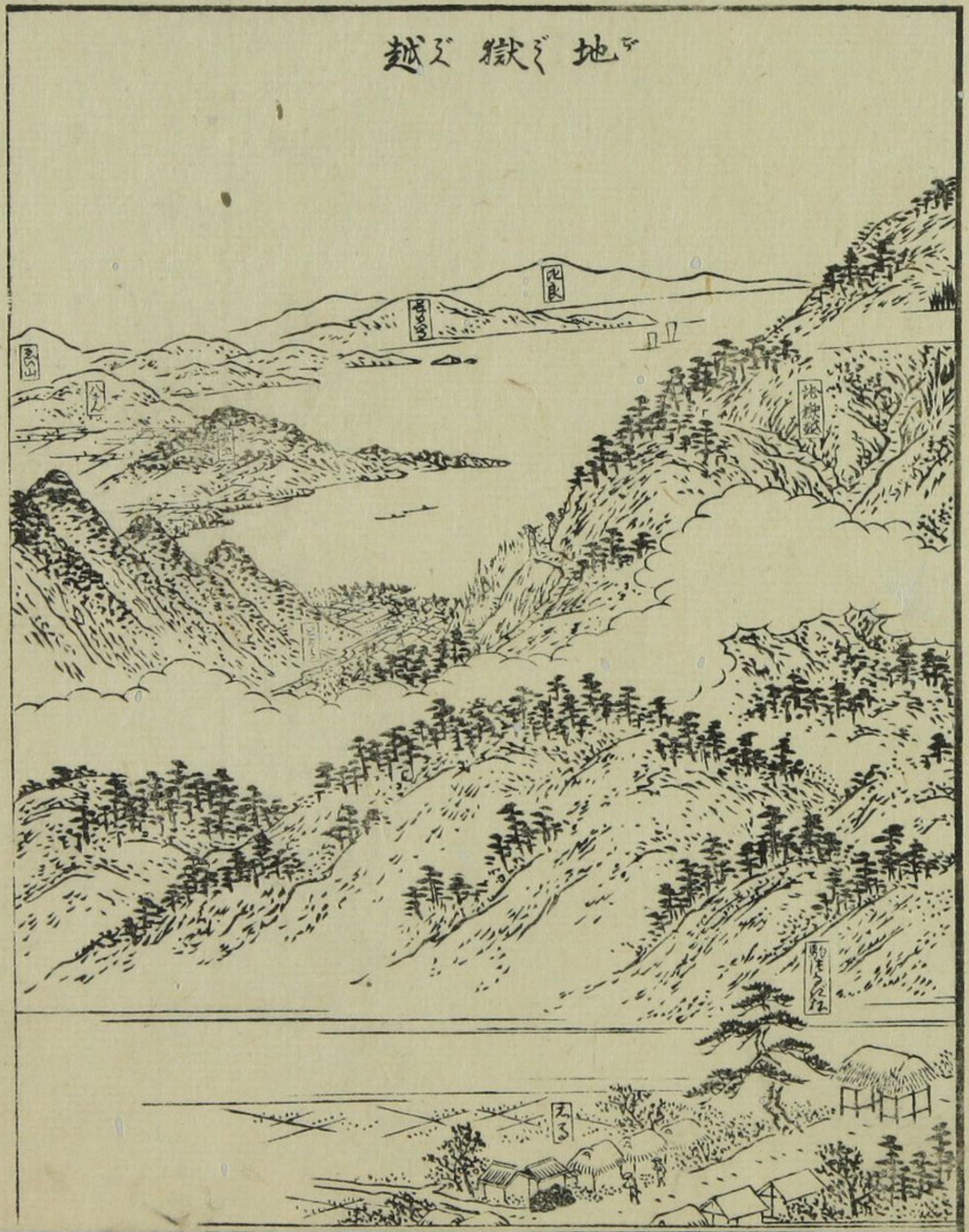
甲斐信玄を計りて之と兩公の間隙を害ひて而よ遂小矛相と

形永元龜三年七月宇治橋邊不捕義経ば信長震殺へ攻

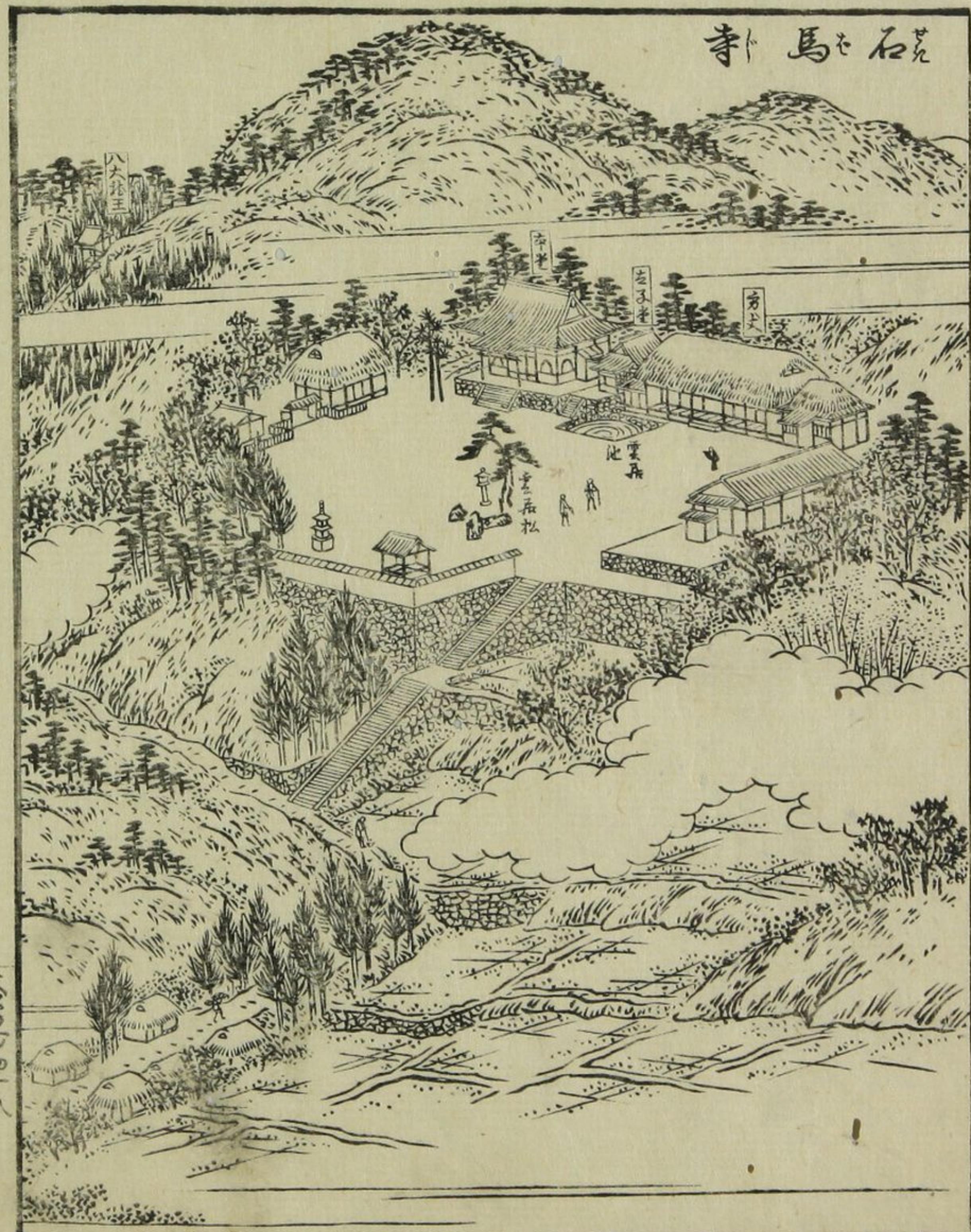
敗る義昭お方なく河内玉毛に墜り後をあら勢を一時の間茲

京都信長に奉り小脣に威記云信長公天正四年正月近江國

越後獄地



石巣馬寺



地獄越地獄越安土山より石馬川並小

難トて云ふ事は伊陽より御ありそれ故に極く安土よりは不
詮云此坂路甚儉にてゆ一今をむかへ魏志寺滅病去のもの
は道小逃焉者救ひだあひと父こゑび岩石ふうれえひ本
根木跋距て倒拂其上底駆逐逃る者多く故不名づくとす
は炭より見せば安土山の藁湖水溢て服下に八臘の
市中長令も山水差是多景鷗遊小向云々経唐詩の松坂亭
比叡山比良の高根たうねより登國の此浦とゆきよねうて勝うある
ふもの奪育ゆくの月月けくをすすれ海おれうて辭さく
て津海つ一列れの風景ふうけい内の地ぢりべ一

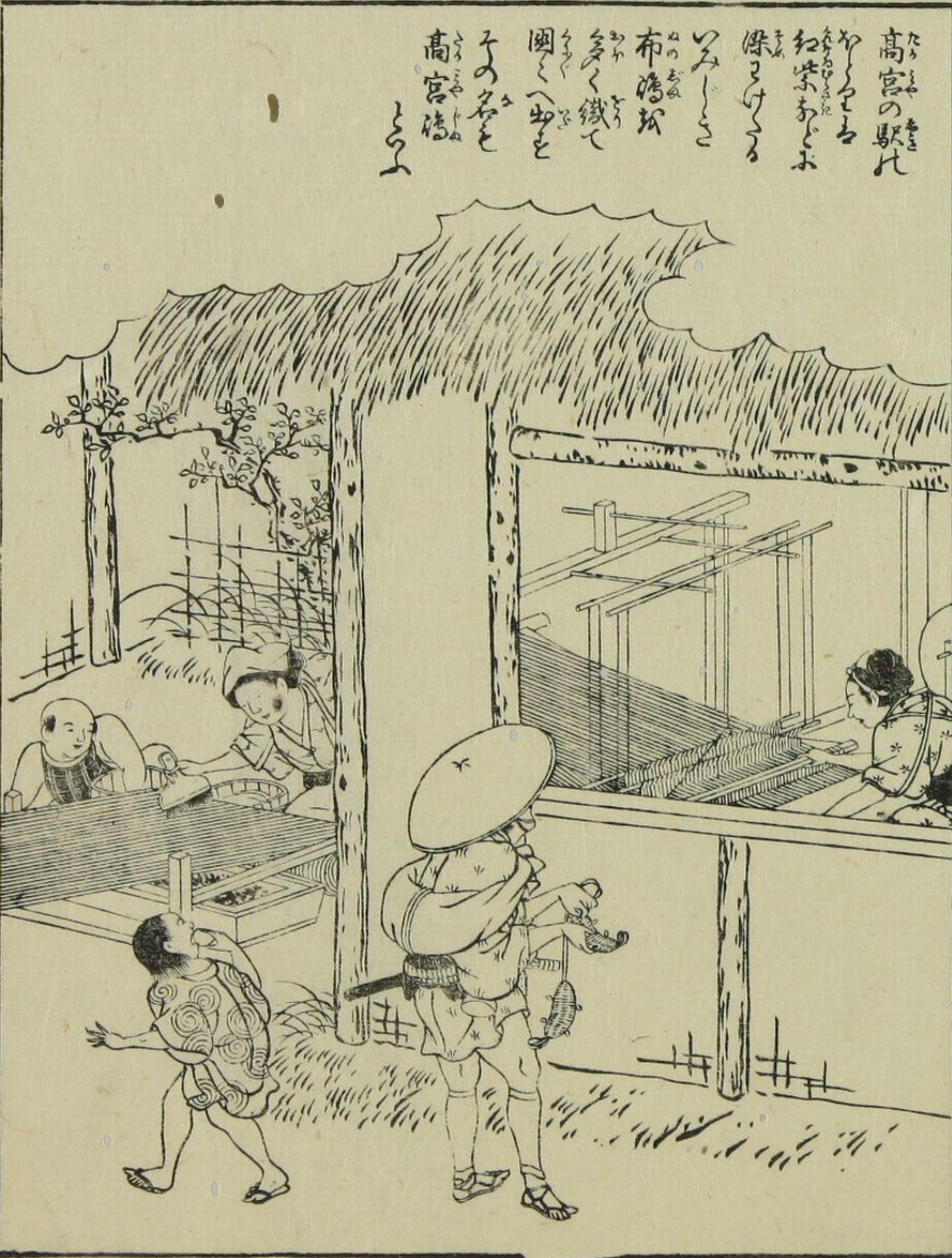
それぞれは路じ通つるを

織織山石馬禪寺山石馬禪寺

神祇郡石馬村の上小ゆ

羅宗源家妻と浦都微山と云

羅島



寺尊 終陀佛 惠心僧都の地

南無佛太子等像 布自作

四天王大像 鳥佛作地

十一面觀音 右日地

地藏尊 運慶作

閻魔王

小班皇帝

役行者 布自作

十一面觀音 太子布地

西方大威德明王 上日地

方丈本尊千手觀音 安阿院地

北方多門天 上と同地

其外什寶事上朱衣の釈迦佛も唐思恭の等不動尊も弘法大師の等孫陀三尊は惠心大筆跡見不動明王も元三太階の書を有り役行者の墨跡も布自筆也。八大龍王社山頂小あり山神堂と云ふ旱のとれ農民もるとその時神徳あり。柳樹山在推古帝北布宇聖體をモセ二案の布附驥駒小瓦圓内が巡視仰て此色靈地うりとて繖とちよて立候其五箇ものうち

又良馬もけ里ふどぐり絶不覺く石を以て放不キの跡と云ひ石馬今寺の種麻農家の躬是の年歴千歳土をば逢札の附たる荒落せし近幸雲居禪院も本門もむくに立てば再興あつ則雲前よ極れ。孤雲居松もよ此禪院之正保の頃乃人よりて後考所院

名寄

常安と賜ふとぞ圓へ

愛
川

愛
川

馬尾瀬水東流す附水也。高文傳は

後教院

移り船を一溪乗とく

け駄立く古橋村ありけもとみね布橋と織川筋高文傳と
つよ高橋を立く千枚材ありて四十丈院材もよあつて
由緒發るよかず於ち風の寺なり

四十九院唯会寺 四十九院村もあつ能率山と号す

辛亥末寺東風

車尊門孫陀佛

釋三足詳

苗山治聖武帝の御宇行基大士の影鉢にて古法相天威宗乘空形之が車尊門孫陀佛と今書院は安徳文和年中よりは後走處院行在所に移り山号の新舊も妻日ぬ神の號号宿院を喫ふ竹林の中には左の右治て老松あり庭中四十間の假山水石の邊に樹木の中には左の右治て老松あり紫石御墓の側より山中松ケ岩とよぶ前山野高才口又許は石聖日毎天うるんと手す夜も宿不及

馬塚雲後小ゆ弘長年中治の巷女馬小ゆうよ其馬は御子で葬る所よりて寺の中に墓をとふ御石集ゝよもあゆ成色く浦ら村小ゆくは町の店舗見事ば藤骨柳はく桜の木をほうよ御う左の方山崎とよ前わく信長卿の代山崎源吉左衛門尉居城へけり其次本ほうせ村

高宮川

郡の名ふよて名づく

高宮

鳥居本中で一里半駅上布鴻教をあよ家多く
けりく農家に高宮鴻糸布多藏牛うすを
高宮布とよ富中小多加多布あつ是より高宮川許

道をくふ声變の鳥居本中をうね

尚自

高宮

賀太社多何神社二座

辛社祭神伊弉諾尊

拜殿樓門本社のひでのすだ神本中社の

末社辛社右の方小神明兩社向日社熊野本宮日朝宮

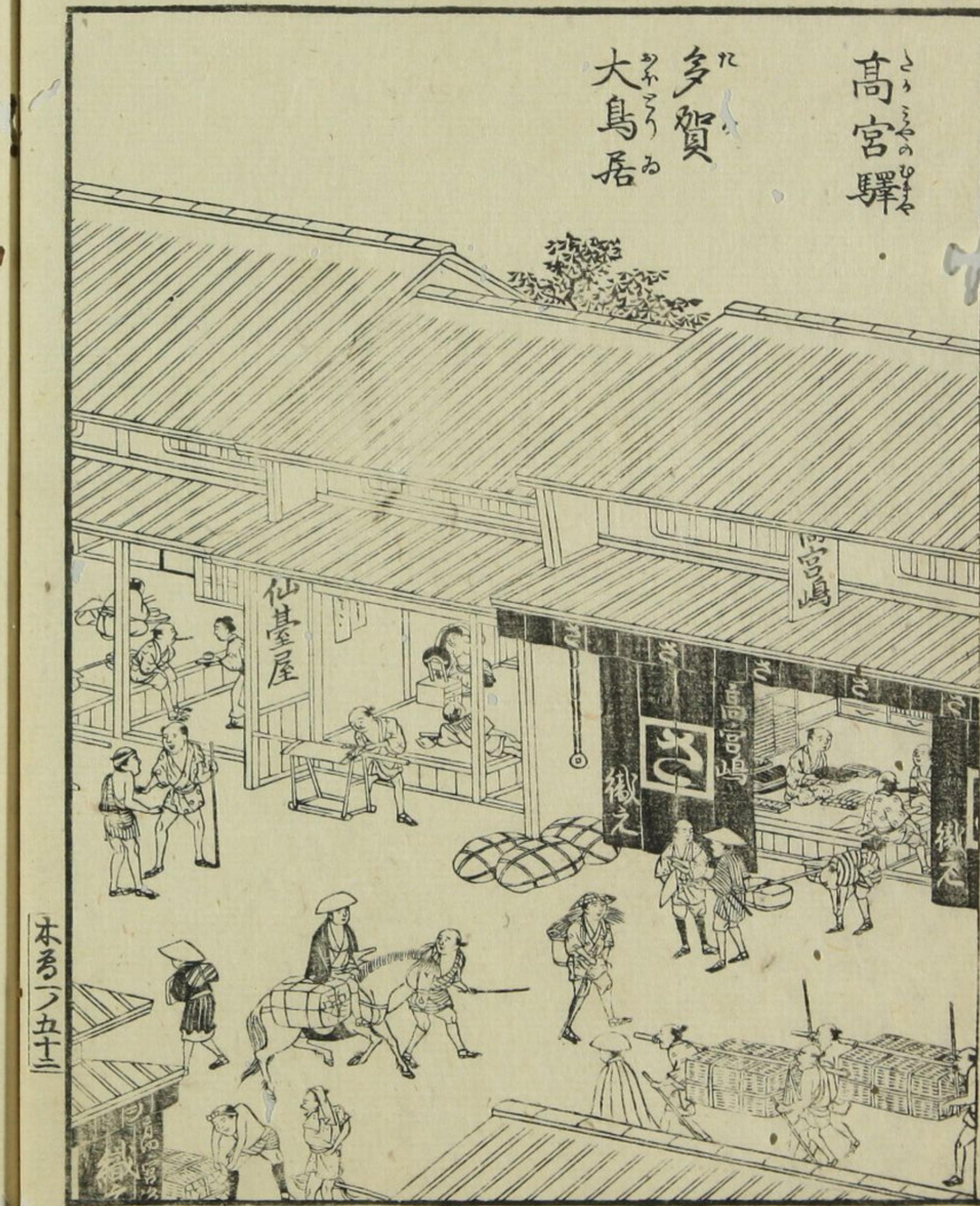
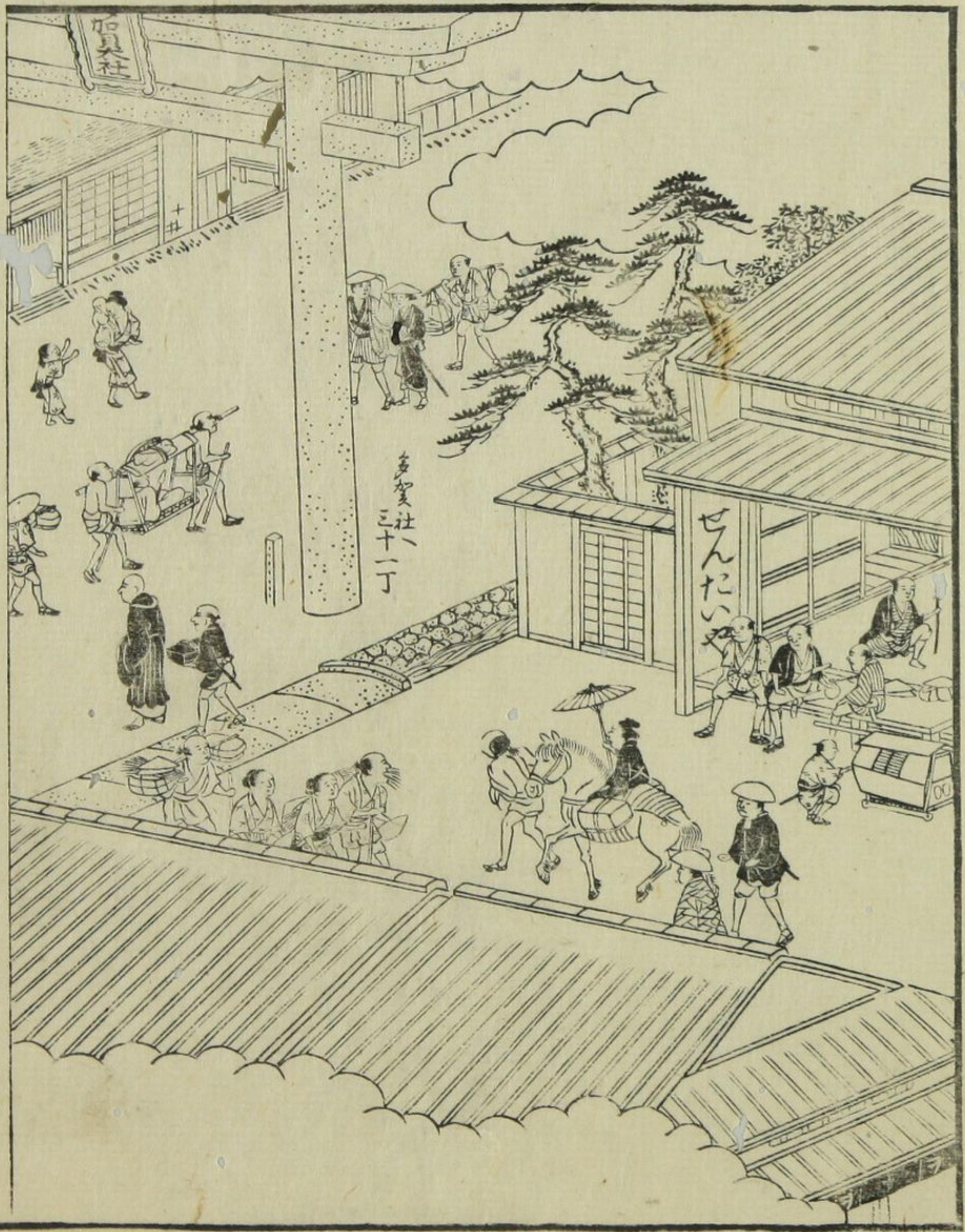
神樂殿奥左の方小三ノ宮益玉堂

神代卷云

伊弉諾尊構幽宮于淡海之洲寂然長隱

又云

尊登天報命仍留宅於日之少宮矣



古事紀云伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也

神書鈔云

日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也
近江在艮方日之所初出也故曰日之少宮出

雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社と天照太神乃そちの御神坐す伊勢參
宮の奉道をねくあくふ多く詣するなり例祭も卯月二年の日
この御旅祭人とぞ遠近の人々高宮の町小群集して旅ひども皆
は津神乃威徳祭ノ別處也不動院とて神領三百石社地廣
してある附を芝坂山相撲ありてせりづら賤ひいもんはま浦川を
は園の大社ありとせむ

多賀より田隴を涉るひく一里半ばかり先に庄名り一かよ
不知哉川の堰ふ出か

不知哉川

一名大垣川

古今

つぬきれとこのさうるいわ川はとこよ我名りは

はあああああれどろあすれぬめふなよと

續千

いさや川今や冰も發ぬ乃とこの山風をくゆ

平時光

鳥籠山

新古今

假小籠尾山とも云

支本

あすふちふる病の枕小路へ傍く轡きとこれ山風

演金之

日

鷺廻ぬみう鳴りとこせよたびの枕小聲送る

續成

石清水八幡宮

扇塚近年江戸森田氏建ふ

は鳥すうと走根林下へ生る道西又右の方小聲聲よう衝立

出る道西東圓よう東落の道又小野村道の右北上不石佛

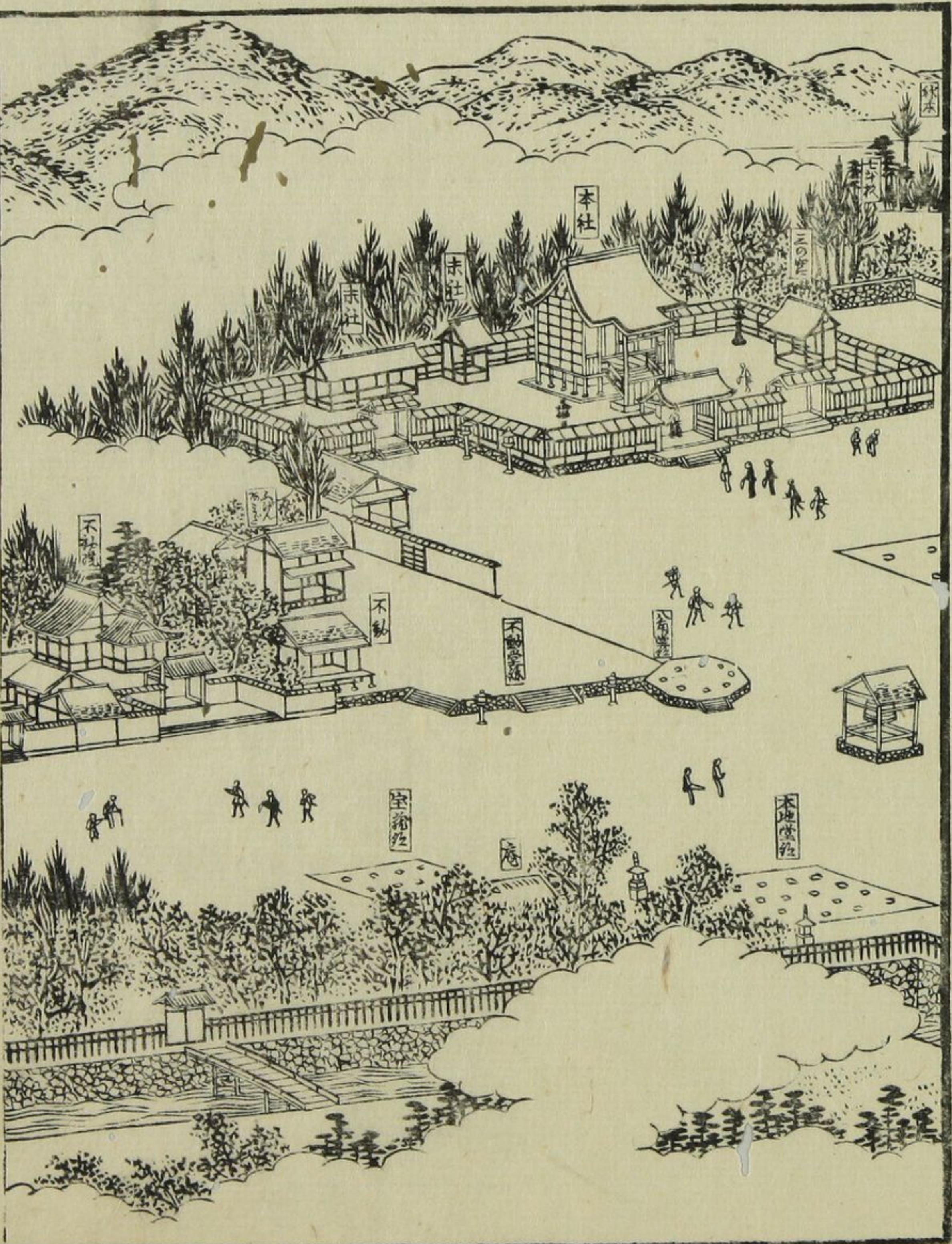
北落堂あり小町塚ともよ

小町塚

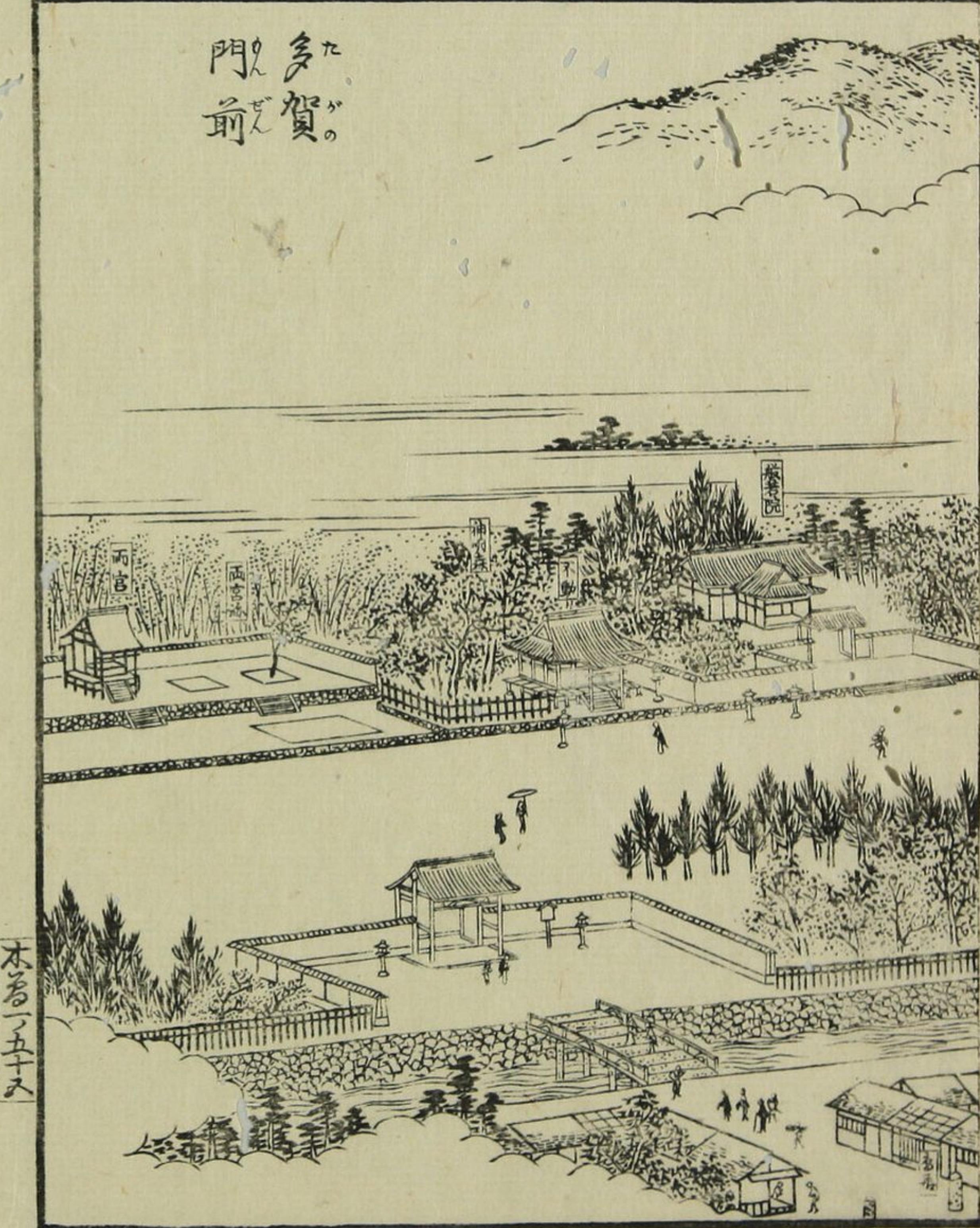
其處りゆ考だ

家集

ゑりつ我身の累やあく縁はるふとゆの處とぞへ 小町



多賀
門前



本著一五十八

日

鳥居平
近

番場まで一里六町むすび多賀社乃居居駅小あつとう
名波くふ今を形へ差扣まで一里八幡へ六里け駅の名わ神教
丸佐小鳥居平赤玉ともつけ店多く

糸原道標

下

街傍なり

磨針嶺

は瀬の茶店より直下せ庄眼下小屋清翁摩祠翁妻

里長渓をも小向の村ノ木行生鷦鷯多果鷦鷯小若志

津嶽鮮耳邊にて潮水洋くた中にゆきよ松瓦と風雨

美親うり茶店より望湖堂と書いたれ艸庵の筆に深壯親

と向ふ白芝の毫疏人の筆也

大根山

大上郡小河内慶長六年安家附トキ

士名家元七百枚海城下の所八十町

近に國ひひととて新エ親ちの移所とをもつてうかがふ
右文書通後ふまえまづいゆく井の事とふるあうけま

夫本

ひきゆきと雪の門と笑へて八重城をサム達のまわ

経信

よと壁す春宿の山に朝日升へと晴てく志をうらじ
ふく松原 外と松原村とつよ

後古

すすりう我あせね余ちひり玉死平十今天と万代

大島の
お長

磯崎社

ね原村と海邊二十町
がくく波人秀こうふあうくら小祠あう

祭神

日本武尊

磯村の生去神とん
自名の神と機と

例祭四月八日

素神

日本武尊

磯村の生去神とん
自名の神と機と

例祭四月八日

素神

日本武尊

磯村の生去神とん
自名の神と機と

例祭四月八日

筑摩社

まのゆる
筑摩村のあふあう

祭神

市杵

鳴姫命

拜殿

辛社の

ああめ



近江國佐奈明神宮 神事
女也男へたふ教ふ酒と縄を懸くその禁れ日すもまほる
うり男あやこへたる人見どめりうりてかへすり
形ど志はまし物の所にて廻みよじくあ氣を教農
あくしていの神をすまう形へどするすり

あまうるきとまの事とせむほまうるく縄を教も
此社と延喜式不載られくる坂田郡の内日強神社うるん免
むうく土縄の附て縄を被き渡す小馬とて行へとすはむ
のち中より一ツ生くあれすく豆の飯と粉と食食せりとせ
聞由今をば多くえびく毎春四月八日瓶摩の生土より
中より奉へハツより十二朱やでの女童紙もてうらくを方
縄を一つ被き鳥帽子緋衣をとく一神社稱つるを
瓶摩野 神社のあれ社と

万葉

佐奈聖不生廟は生教小深生くさりとよすあ 三女即

且妻里

支本

御殿やうと妻私モ出ふるわづかく聲風やあらん 家長

因

濟津やまの介みふるる日代承とくもゆか宿 岩轟

長濱

支本

御殿やうと妻私モ出ふるわづかく聲風やあらん 家長

因

濟津やまの介みふるる日代承とくもゆか宿 岩轟

此地の衣毒と絵縫縄袖綿袖綿約柳其外種々の物あり所居

凡

え縫所許わて縫ひ作縫手賜まう栗は地吉豊臣秀吉

將軍山教生寺舍那院

因

此地の衣毒と絵縫縄袖綿袖綿約柳其外種々の物あり所居

凡

え縫所許わて縫ひ作縫手賜まう栗は地吉豊臣秀吉

卒社八幡宮

因

此地の衣毒と絵縫縄袖綿袖綿約柳其外種々の物あり所居

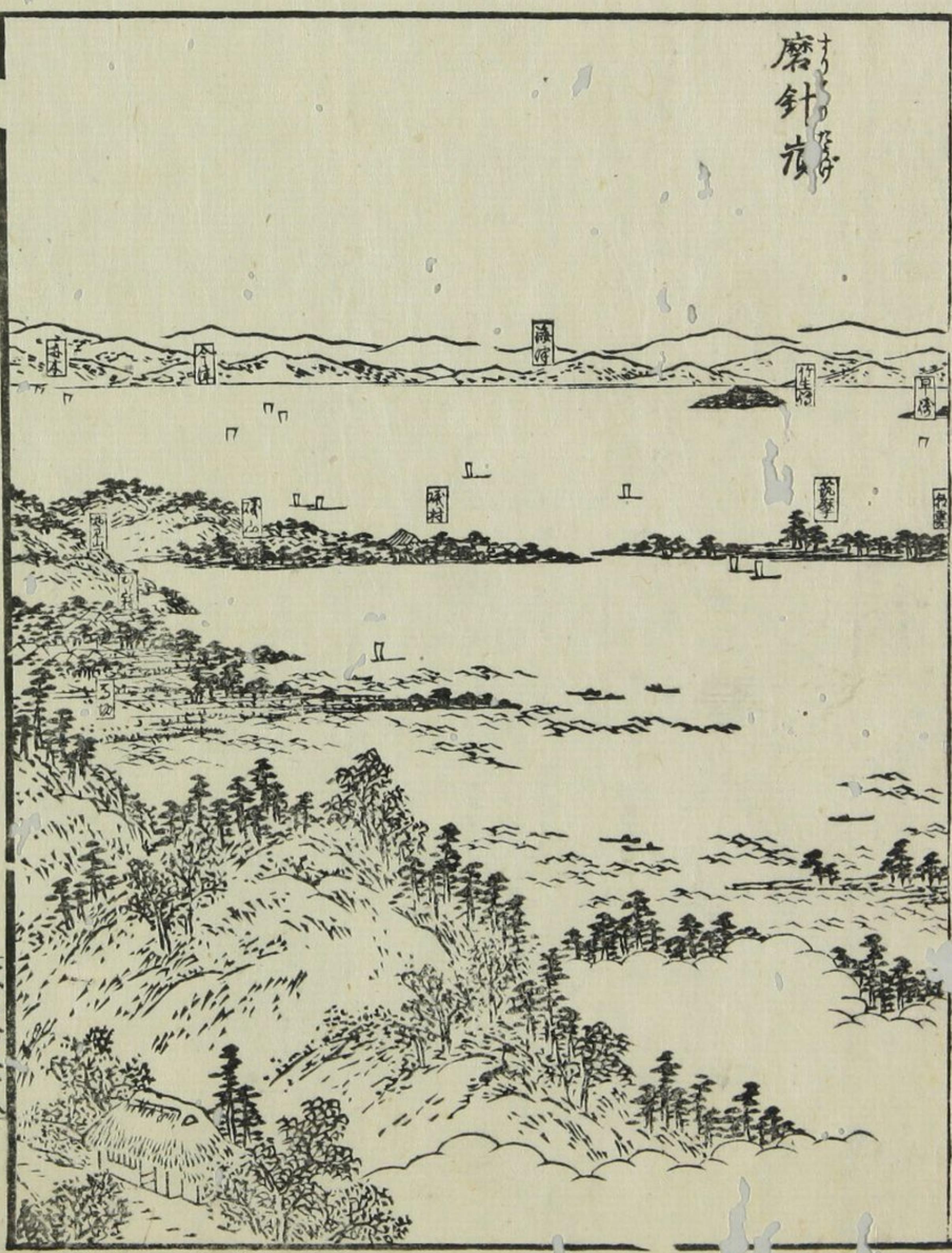
凡

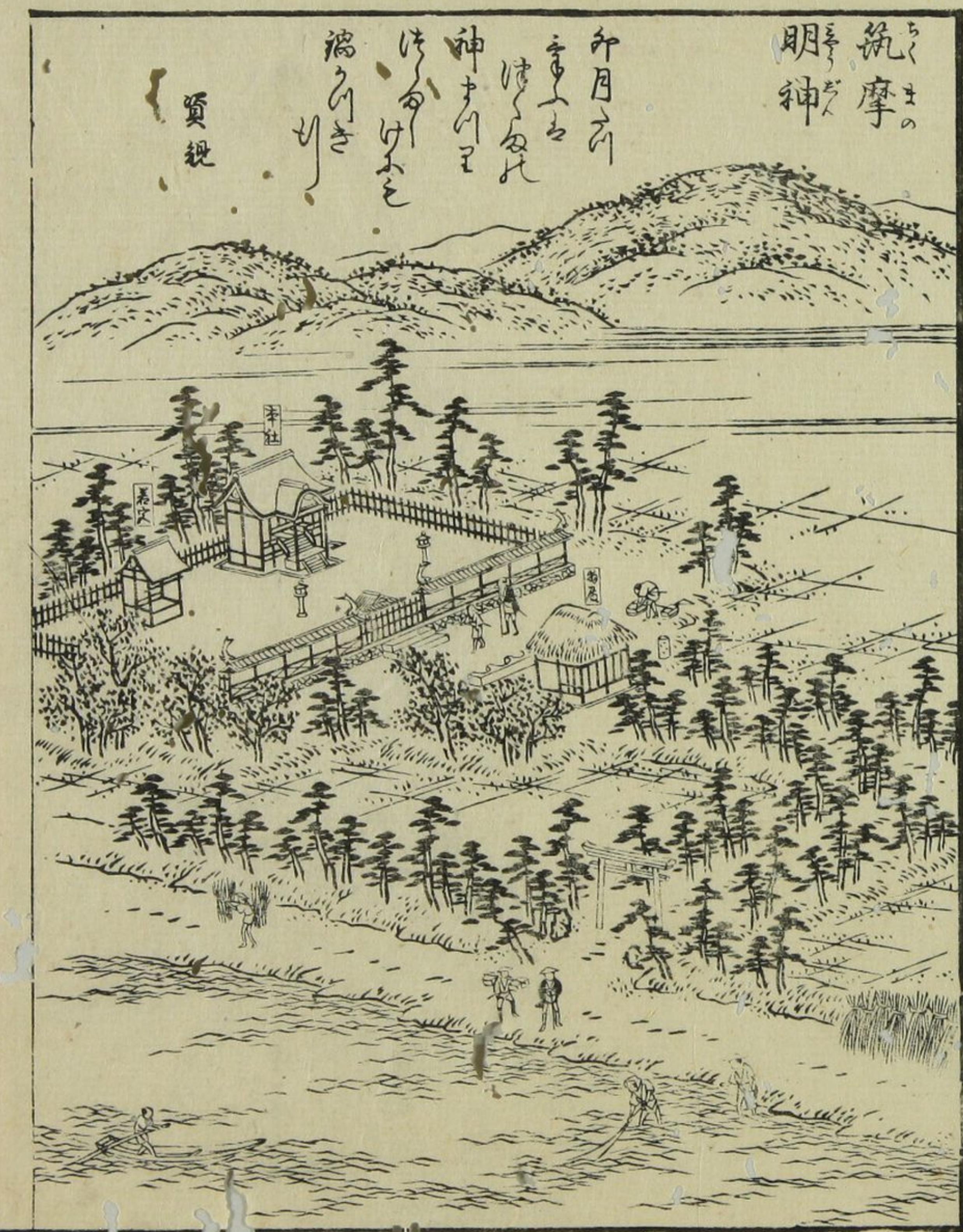
え縫所許わて縫ひ作縫手賜まう栗は地吉豊臣秀吉

高良社

卒社の東

地主神宮





猿野二所祠
 薬師堂
 地藏堂
 上と日並立
 稲荷祠
 上と日並立
 護摩堂
 日御子事
 當社を初島八幡を節義家公東夷征伐の附て小勅使よりひ
 厚く手崇あつて秋從三千石寄附し終其後後三條院勅使前
 ち一経の勅使下向あくせん放生舎を稅りせし方星雲里あつる
 天正の後信長の代大ひよ廢し秀吉公御在城の附森は當社於
 百萬石喜作下向之場中妙光院の庭中ハ曾昌利新左衛門が
 所て波瀬池眺石恩智幻梅等こ此度小西久波月臺の額を
 春源の筆例祭と九月十五日易て幸山十二所とよす半社
 却て云社を歸ア其山々の間どうりから下小風流の松云城を
 山の木立く雜じむ至く壯觀きつこれを以てむそ遠通す
 あく一二段を消し群集さる半楠麻の木へ名づけ長慶系

とて号す名島エカミ一は津旅所ツルイシヨの方小乃コノマニて例シテ祭マサニ神宝大刀其
外神カタハシミミハ神墨カタハシミアハ神樂カタハシミ秀右翁カタハシミ代營カタハシミアヒーとせカタハシミ御所カタハシミ事
案カタハシミの前日カタハシミテアヤカミセ親カタハシミあるハ拍戸カタハシミの店カタハシミて縁カタハシミひつしん方カタハシミ
寔カタハシミ小英雄カタハシミ後カタハシミ傑カタハシミのちカタハシミ先カタハシミ至カタハシミ落カタハシミヒー其遺風カタハシミ今カタハシミ小あカタハシミて目カタハシミと
喜カタハシミしむ幸鄙カタハシミ易カタハシミハ取カタハシミうびカタハシミ死カタハシミ奇親カタハシミ

竹生島タケノシマ

津井郡タケノシマ海中タケノシマ母タケノシマアハ鷦タケノシマ鷯タケノシマとタケノシマ利タケノシマくタケノシマ継タケノシマ十タケノシマ年タケノシマ百タケノシマ十タケノシマ尋タケノシマ東タケノシマの岩タケノシマ下タケノシマの岸タケノシマ東西タケノシマへ運タケノシマる冠タケノシマ有タケノシマ練タケノシマ七十タケノシマ年タケノシマ百タケノシマ十タケノシマ尋タケノシマ東タケノシマの岩タケノシマ下タケノシマの岸タケノシマ東西タケノシマへ運タケノシマる冠タケノシマ有タケノシマ通タケノシマよく海タケノシマが完タケノシマの中タケノシマを駆タケノシマまわタケノシマく長滨タケノシマ六里タケノシマ

本社辨財天女タケノシマ左タケノシマ右タケノシマ二神タケノシマ阿吽タケノシマ宇タケノシマ賀タケノシマ神タケノシマ法大師タケノシマ四臂千手像タケノシマ長六尺三寸行基タケノシマ之タケノシマ地タケノシマ巡タケノシマ西國タケノシマ三十番タケノシマのれ

祖堂タケノシマ

安基タケノシマ

行基タケノシマ大士タケノシマの像タケノシマと

神社考云タケノシマ竹生島者タケノシマ在江州湖中タケノシマ其巖石多水精寶珠タケノシマ本朝五奇異タケノシマ之其一也タケノシマ傳言孝靈天皇四年タケノシマ江州

地折湖水始湛駿州富士山忽出焉景行天皇

十年湖中竹生島初漏出云

昔行基菩薩來此島時タケノシマ神女現形逢基タケノシマ基初建等置辨財天女像タケノシマ

竹生島什寶タケノシマ

小枝苗義經所持敲筒靜所持脇指辨慶所持吉次太刀

俵藤太太刀タケノシマ

傳教大師最勝王經

天狗爪

馬角

弘法大師船板名彌

玄上琵琶撥タケノシマ

松室童子琵琶タケノシマ

仁和寺覺寬僧正水精數珠

俵藤太十種內露硯タケノシマ

松室の仲篭タケノシマ

毎年三月十八日より竹生島小於く神仙會ありワ被其禮うり願くの作の琵琶以佛人仲篭タケノシマこれ小琵琶を与ふ仲篭タケノシマも湖水に

感通傳云タケノシマ

深之一夜沖あみの向仲算詠

神道

仲算

神とおもむかれて海のゆきけまへふくを頼む仲の鷦う郎

仲算

妻の姿方活用の白蛇船をけ清行す年月の景らん

二月十八日竹生島小舟とぼくと雲舟もるの小高樂宮を須臾あつて
喜して私の肉小舟りものらう身までまたあ事よもつて琵琶く
仲算と神祇抱き歌且止に則ば琵琶城こゝ小納へ仲算も後小

其面龜小登アとく其終が不滅をくび 教書出

平生記云
平経政は鷦う郎て神略法樂の物小一曲を謡んとて化童琵琶とくら出
船人や室に安に幸くとて寺傍即琵琶と抱く聲くも神経政さ
よせ経ひて樂ニツニツ強く後弦上石上とく祕曲以強じ終の神
納受やもくすひそむ社壇より自孤坐く遊びての社不思議なれ經
正琵琶伏闇く神明の化理とめづけり思ひ所願成就疑あり
てうきこく



千早振神小神の力アリや主病くも無乃万氣氣

竹生島乃そば小山阿彌うれむりと生せし傳うり又は

少勢田川の下流ニ黒津の之間シトコトアツヒ小崎ハモトテ行生島乃

てちう小山阿彌トテ之モノ被小毎年二月三百鯛浦アリトヨウ辛

あリ迴七十丈間水面一丈アホ高サ立圓法村

琵琶湖

南北二十里東西七八里許武古四五里定ノハ周迴六十里喰湖ノ
ノ一脚アレドモ小モトテ行アリ船モリシ万景に此

續千載

日
新後拾

赤雲白
太政大臣

夫本

日
新後拾

赤雲白
太政大臣

